

日本薬学会第 124 年会

ランチョンセミナー

## 感染症と DDS

日時：2004 年 3 月 30 日（火）12：30～13：30

会場：ハイアット・リージェンシー・オーサカ  
ボールルーム D（G 会場）

座長：島根大学医学部附属病院 教授 薬剤部長 岩本喜久生 先生

演者：岡山大学薬学部 薬物動態制御学分野 教授 木村聰城郎 先生

ペニシリンの発見以来、数多くの抗菌剤が開発されてきたが、それらの中には、強い抗菌活性があるにもかかわらず、臓器毒性などの副作用のために臨床的に用いるのが困難なものがあり、一方では、消化管から吸収されにくいいため経口投与が困難な抗菌剤も少なくない。それらの問題を克服するために、多様な DDS の概念・技術が導入されている。難吸収性の抗生物質をプロドラッグ化により経口投与可能とし、アンホテリシン B についてはリポソームやナノスフェアのような脂質分散剤とすることにより有効性・安全性を向上させることに成功している。

最近、ウイルス感染に対する予防や治療に関する研究が盛んに行われており、中でも経口ワクチンの開発は興味深い。これまで、ワクチンを M 細胞に送達させるために微粒子製剤が検討されてきたが、M 細胞への結合とそれに続く取り込みに最適な担体微粒子の性質については未解明である。インフルエンザウイルスの感染に対する予防に、インフルエンザウイルス蛋白質ワクチンあるいはプラスミド DNA ワクチンを感染経路である鼻粘膜に適用する試みも行われている。

本セミナーでは、感染症の予防と治療のために導入された、あるいは検討されている各種 DDS について概説したい。

共催：日本薬学会第 124 年会  
京都薬品工業株式会社